高　岡　遺　跡

―― 新井原18号古墳 ――

長野県飯田工業高等学校学生会館建設工事に先立
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1991年3月

長野県飯田工業高等学校学生会
長野県飯田市教育委員会

高　岡　遺　跡

―― 新井原18号古墳 ――

長野県飯田工業高等学校学生会館建設工事に先立
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1991年3月

長野県飯田工業高等学校学生会
長野県飯田市教育委員会

序

当市を中心とする飯伊地域における職業教育の一端を担い、地域の工業振興の原点ともいおる人材を供給している長野県飯田工業高等学校は、長く市街地西端の上飯田にあったが、その建物は老朽化し、校地面積も狭く、教育施設としては不十分といわざるを得ない状況でした。

このたび、市内座光寺に移転新築され、平成元年10月から新校舎での授業が開始されています。

その後、周辺における教育環境の整備が順次行なわれつつありますが、その一環として校舎に隣接して学生会館が建設されることとなりました。

たまたま、その計画地が埋蔵文化財包蔵地高岡遺跡の一画にあたり、また、周辺部は当市内でも屈指の古墳密集地帯であることなどから、事前に発掘調査を実施し、記録保存することとなりました。

その結果は本書に記したとおりですが、今までその存在の知られていなかった古墳が確認されました。それは、解明途上にあるといえる座光寺地区の古墳文化研究等に大きな意味を持つ貴重な発見であったと考えられます。

そうした貴重な発見が、学校運営に関与する学生会館建設という必要不可欠の事業実施の中で消失することは断腸の思いではありますが、本書に記して後世に長く伝えることを次善の策として納得しているところです。

最後に、本調査実施及び本書の作成にあたり、多大なご援助、ご協力、ご理解をいただいた関係各位に深く感謝し、衷心よりお礼申し上げます。

1991年３月

飯田市教育委員会

教育長　福島　稔

例　　言

1．本書は、長野県飯田工業高等学校学生会館建設工事に先立ち実施した、高岡遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．調査は、飯田市教育委員会が飯田工業高等学校学生会の委託を受けて実施した。

3．本書の発掘調査に関し、石行遺跡と隣接する地であり、文化財保護法に関する通知書では「石行遺跡」てして扱ったが、近隣地での調査等の関係から「高岡遺跡」とし、発掘調査及び整理作業において遺跡名に略号TKOを用い、近接する地で平成元年度に行なった飯田市座光寺古市場地区の市道建設に先立つ調査との混同をさけるため、遺構、遺物の整理等には略号のあとに当地の地番3441－14を付し、遺構の番号は連番とした。また、新規に確認された古墳については、新井原古墳群の範囲にあたるため、新井原18号古墳としARBK18の略号を用いた。

4．調査実施にあたり、調査対象部分の南西隅を起点とする２m四方の区画を設定して作業を行った。起点から北西へA・B・C、北東へ１・２・３を付し、それぞれの区画の名称はD４・E５などとなる。

5．調査は、平成２年４月17日に建物建設用地部分の表土、埋め土を重機により剥ぎ、調査を実施した。続いて平成２年度末まで整理作業及び報告書の製作を行なった。

6．本報告書の記載は、古墳を優先し、次にほかの遺構を掲載した。遺構図は本文と併せ挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。

7．本書のまとめ・調査の経過等は、小林正春が、遺構等の記述は佐合英治が分担執筆した。なお、文書の一部について小林が加筆・訂正を行なった。

8．本書に掲載された図面類の整理、遺物実測は佐合があたった。なお、同作業にあたり調査員及び整理作業員が補佐した。

9．本書の編集は調査員全体で協議の上、佐合が行ない、小林が総括した。

10．本書に掲載した遺構図の中に記載した数字は検出面からそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。

11．本書に関する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市上川路飯田市考古資料館に保管している。

本 文 目 次

序
例言
目次
Ⅰ 経過 …… 1
1 調査に至るまでの経過 …… 1
2 調査の経過 …… 1
3 調査組織 …… 2
Ⅱ 遺跡の環境 …… 5
1 自然環境 …… 5
2 歴史環境 …… 5
Ⅲ 調査結果 …… 13
1 遺構と遺物 …… 13
1） 古墳 …… 13
① 新井原18号古墳
2） 溝址 …… 15
① 溝址5 ② 溝址6
3） 竪穴 …… 16
① 竪穴1 ② 竪穴2 ③ 竪穴3
4） 土坑 …… 17
① 土坑12 ② 土坑13 ③ 土坑14
5） 遺構外遺物 …… 18
Ⅳ まとめ …… 19

挿 図 目 次

挿図1 高岡遺跡位置及び周辺遺跡図 …… 3
挿図2 調査位置及び周辺図 …… 8
挿図3 高岡遺跡遺構全体図 …… 9・10
挿図4 隣接古墳確認図 …… 11・12
挿図5 高岡18号古墳及び南側用地境土層図 …… 14
挿図6 TKO 溝址5・6 …… 15

挿図7　TKO　竪穴1・2・3 …… 16
挿図8　TKO　土坑12・13・14 …… 17

図版目次

第1図　高岡遺跡出土土器、石器 …… 22

写真図版目次

図版1　調査地調査前北西から、同南西から …… 24
図版2　新井原18号古墳北から、同東から …… 25
図版3　新井原18号古墳西から、同葺石検出状態 …… 26
図版4　新井原18号古墳葺石検出状態 …… 27
図版5　溝址5・6 …… 28
図版6　竪穴1・2、土坑13・14 …… 29
図版7　土坑14、調査地全景北から …… 30
図版8　新井原18号古墳周溝内出土須恵器坏、溝址5出土土器・鉄器 …… 31
図版9　竪穴1出土土器、遺構外出土土器 …… 32
図版10　遺構外出土土器 …… 33
図版11　重機による表土剥ぎ、遺構検出作業 …… 34
図版12　遺構検出作業、古墳周溝掘り下げ作業、古墳葺石検出作業 …… 35
図版13　遺構掘り下げ作業、清掃作業、測量作業 …… 36

Ⅰ　経　　過

1．調査に至るまでの経過

長野県飯田工業高等学校が、平成元年10月に、上飯田から現在の座光寺地区に移転開校し、諸施設の整備も順調に行なわれ、教育活動も軌道に乗りつつある状況となっている。

そうした中、同校の課外活動に、また同窓会の運営等に重要な意味を持つ学生会館の建設が、同校敷地の隣接地に計画された。

同校敷地は、昭和58年から60年度に実施された発掘調査により、縄文時代から近世にわたる間の様々な埋蔵文化財の発見された場所である。今回、学生会館建設が計画された地は、同校敷地に隣接しており、当然、同様の埋蔵文化財の包蔵されている状況があると推測された。

そのため、飯田市教育委員会と学生会館建設の主体者である財団法人飯工会との間で、埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて、平成元年度後半より協議を行ない、飯田市教育委員会が発掘調査を実施して、記録保存を計る旨の合意がなされた。

それを受け、平成元年４月12日財団法人飯工会理事長今村正生と飯田市長田中秀典との間で、遺跡発掘調査に関する委受託の契約を締結し、飯田市教育委員会が発掘調査を実施することとなった。

2．調査の経過

調査は諸協議に基づいて平成２年４月17日に着手した。まず、調査の対象部分となる建物位置の表土を、重機により取り除いた。耕作地に盛り土されていたため、遺構検出面まで1.5～２ｍあったが、一日でこの作業が終了し、翌18日には人力による遺構検出作業に入った。重機による表土剥ぎ作業の実施中に、黒色土が帯状に検出され、消滅した古墳の存在が確認された。作業は、新たに確認された古墳周溝の調査と平行して、周辺部で検出した溝址、竪穴、土坑等の掘り下げを行なった。完掘後随時写真撮影、測量調査を実施し、４月21日には古墳の葺石の検出も終了した。その後、古墳の細部調査と土層断面図等の測量調査、写真撮影を行ない、４月25日には現地での作業をすべて終了した。

その後、平成２年度末まで飯田市考古資料館において、記録された図面・写真の整理、出土遺物の水洗・注記・復元作業、実測・写真撮影等を行ない、報告書の作成にあたった。

3．調査組織

(1) 調査団

調査担当者　小林　正春

調　査　員　佐合　英治

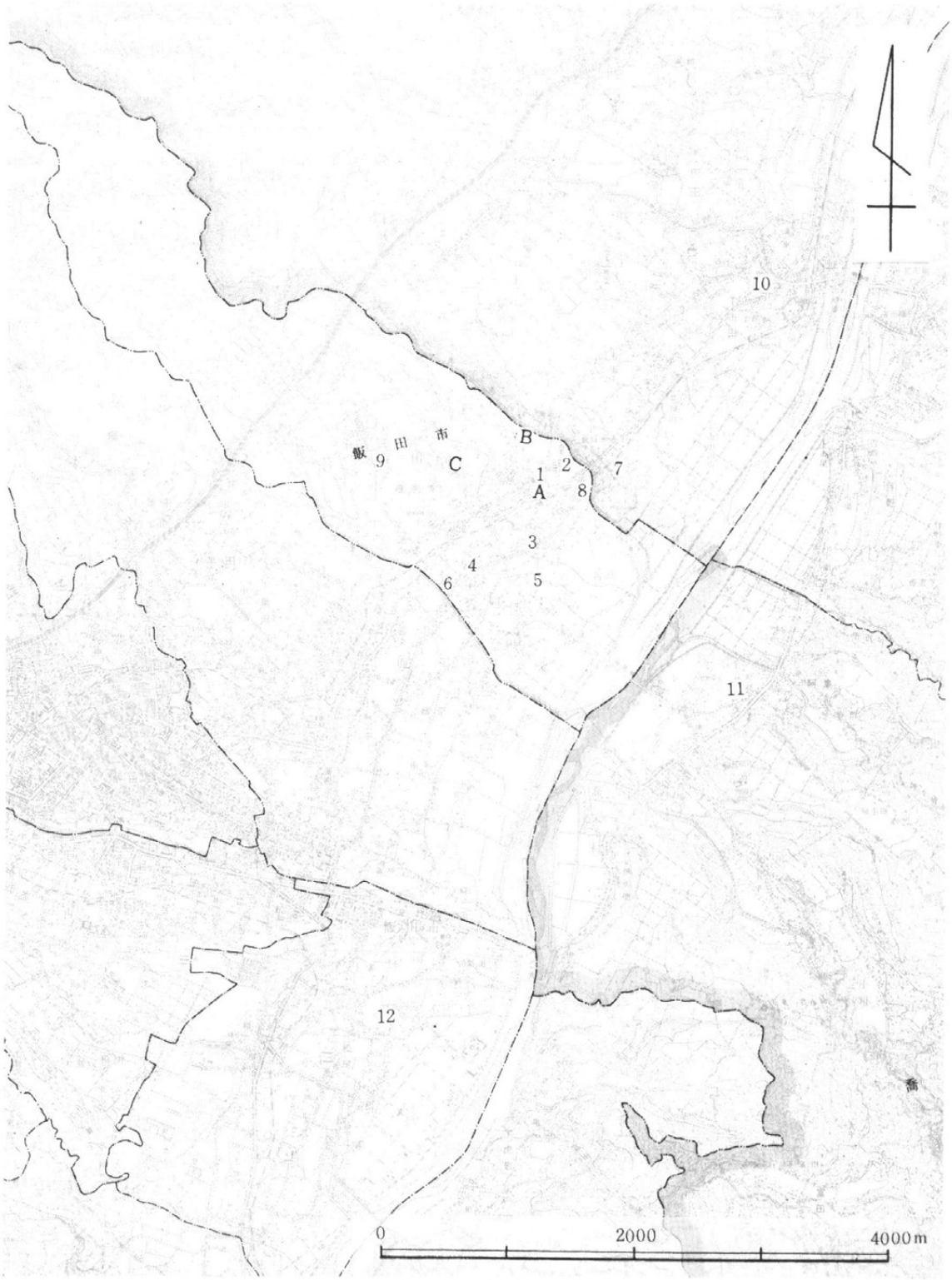
作　業　員　今村　春一・岡田　順治・片桐　卓治・木下喜代恵・沢柳　敞介
豊橋　宇一・福沢トシ子・細井　光代・藤本　幸吉・松島　卓夫
正木実重子・向田　一雄・吉川　正実・矢沢　博志

整理作業員　池田　幸子・伊原　恵子・大蔵　祥子・金井　照子・金子　裕子
唐沢古千代・唐沢さかえ・川上みはる・木下　早苗・木下　玲子
櫛原　勝子・小池千津子・小平不二子・小林　千枝・佐々木真奈美
田中　恵子・筒井千恵子・樋本　宣子・丹羽　由美・萩原　弘枝
林　勢紀子・原沢あゆみ・平栗　陽子・福沢　育子・福沢　幸子
牧内喜久子・牧内とし子・牧内　八代・松本　恭子・三浦　厚子
南井　規子・宮内真理子・森　　信子・森藤美和子・吉川紀美子
吉川　悦子・吉沢まつ美・若林志満子

(2) 事務局

事務局長　竹村　隆彦（飯田市教育委員会社会教育課長）

事務局長　中井　洋一（飯田市教育委員会社会教育課文化係長）
小林　正春（　〃　〃　文化係）
吉川　豊（　〃　〃　〃　）
馬場　保之（　〃　〃　〃　）
篠田　恵（　〃　〃　〃　）



1．高岡遺跡調査地点　2．石行遺跡　3．恒川遺跡群　4．流田遺跡　5．欠野遺跡
6．正泉寺遺跡　7．高森新井原遺跡　8．新井原遺跡　9．座光寺原・中島遺跡　10．北原遺跡
11．阿島遺跡　12．寺所遺跡　A．高岡1号古墳　B．畦地1号古墳　C．北本城古墳

挿図1　高岡遺跡位置及び周辺遺跡位置図

II　遺跡の環境

1．自然環境

高岡遺跡は飯田市座光寺高岡地籍に所在する。

飯田市座光寺は、市街地の中心から約５㎞北方にあり、南を下伊那郡上郷町、北を同高森町に挾まれ行政区画上は飛び地となっている。座光寺地区は、東は天竜川・西は中央アルプス・南は土曽川・北は南大島川により区切られた旧座光寺村で、南北は約２㎞と狭いのに対し、東西は中央アルプス前山まで約7.5㎞である。

当座光寺地区は、天竜川西岸では比較的良好に段丘地形が捉えられる。東西に長い地区内を、南北方向に走る断層崖により段丘が形成されている。地区のほぼ中央を横断する比高差約100ｍの段丘崖で、山麓から発達した扇状地が段丘面をおおった俗にいう上段と、小段丘崖下に湧水地を控えた下段とに別れている。両段共に数段の小段丘が形成されており、この段丘を小河川が浸食して小さな谷間を作っている。それにより、各所で微地形の変化が認められ、扇状地、段丘面が複雑に連続する状況がある。

本遺跡は、旧座光寺村東北部の低地となる、天竜川第三段丘の緩傾斜地に立地する高岡古墳群を含めた一帯で、南大島川により北東を浸食された小段丘の先端に近い。また、調査地点を含めた一帯は、南大島川が下位段丘面部に流出した位置にあり、それにより扇状地の扇頂部付近に立地するため、調査範囲の堆積土の一部と西側の地山には石礫が混入する。

調査地点は、高岡一号古墳から北へ150ｍを測る地である。現地は埋め土され、周囲は宅地となっているため、旧地表面が認められる部分はなかったが、周辺の地形から、石行遺跡の南端に続く傾斜地であったと考えられる。南東側は新井原遺跡に続き、高岡古墳群と新井原古墳群とが重なり合う部分である。調査地点の標高は444ｍである。

2．歴史環境

埋蔵文化財は縄文時代から近世まであり、一般的には地中にあるため、その所在や具体的な内容は不明であり、発掘調査により具体的な内容が示されるが、例外として、地表に見える構造物としては古墳と中世の山城２つがある。

座光寺地区は、古くから古墳の多いこと、土器、石器の散布の多いことで知られており、家宝として鏡、玉などを所蔵している人たちも多い。

遺跡の開墾、盗掘による破壊は地区内全域におよび、盗掘にあっていない古墳は皆無といって

良い。

発掘調査の最初は、大正11年11月に、現在の東日本鉄道飯田線にかかって調査された、大塚（新井原12号古墳）である。この頃鳥居龍蔵氏による遺物調査が行なわれている。大正12年には畦地１号古墳石室が、座光寺小学校職員と高等科生徒によって、清掃調査され、銀製の「垂飾付長鎖式耳飾り」が発見されている。その後、昭和30年代まで記録は無く破壊のみが進んでいたと思われる。

昭和37（1962）年には、前年の梅雨前線による集中豪雨（36災）の災害復旧工事用採土に先立ち、下伊那教育会歴史調査部によって、上段の一部座光寺原遺跡が調査され、弥生時代後期の標識「座光寺原式」が設立されている。

その後、いくつかの発掘調査が行なわれ、昭和45年には、中央自動車道建設に伴う発掘調査で、座光寺地区では宮崎、大門原など５遺跡が調査された。

昭和50（1975）年には、農業構造改善事業に伴う道路部分の調査で、中島遺跡が座光寺考古学研究会・下伊那教育会考古学委員会によって調査され、弥生時代後期標識「中島式」の設定の元となった。

昭和51（1976）年度からは、一般国道153号座光寺バイパス建設に伴う発掘調査が、当飯田市教育委員会によって行なわれた。その結果、恒川遺跡群は多岐にわたる遺跡の密集地であり、かつ、重要遺構・遺物の出土があり古代伊那郡の推定「郡衙」の一画として注目された。恒川遺跡群内に「郡衙」の確認を求めて、昭和57年度から、文化庁の補助を受けた恒川遺跡群確認調査が始まり、平成２年度で10年目に入った。まだ確認には至っていないが更に重要性は増している。

以上の地区内における、埋蔵文化財の調査結果のいくつかを踏まえ、地区内の歴史上の変遷を既述すると次のようである。

座光寺地区の埋蔵文化財包蔵地は20余りあり、地区内にある遺跡の時期別分布は、上段地帯に縄文、弥生時代の遺跡があり、山寄りに縄文時代の遺跡の濃度が増している。中央の断丘崖下に古墳、中世山城が位置し、下段には縄文時代から近世の遺跡が複合して分布している。

当地区内において、最初の人々の足跡は、縄文時代早創期の有舌尖頭器の出土例によるが、更に古い旧石器時代から人の住んだ可能性が強い。また、縄文時代においては、その早期から晩期まで途切れることなく、各時代の遺物が、上段、下段の区別なく、ほぼ全域から発見され、伊那谷全体における座光寺の位置からみても、中心的な役割をはたしていたと判断される。

続く、弥生時代においては、地域内において中心的な地であった姿がより明確にとらえられる。それは、弥生時代中期から後期にかけて、恒川式、座光寺原式、中島式と三つの標識遺跡が存在し、各期の大集落が展開したことで知られる。

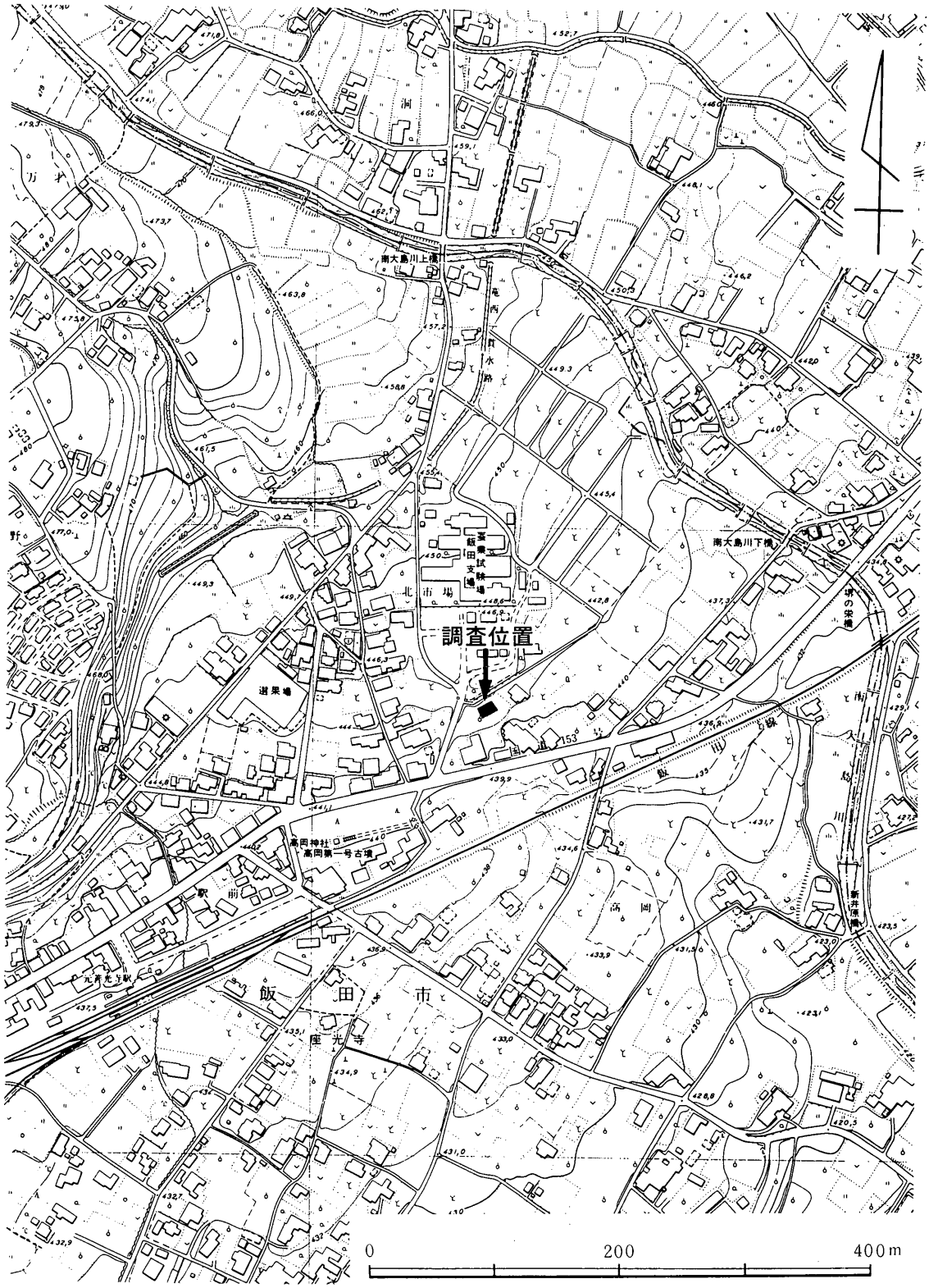
古墳時代を代表する古墳を見ると、現存するものは10余りであるが、下伊那史には、古墳総数66基の記録がある。その後、９基の古墳が確認され、本調査でもこれに加え新たに一基の古墳が調査され、確認総数76基となった訳である。70基をこえる古墳が構築された事実や、その副葬品

をはじめとする内容も傑出したものばかりであり、伊那谷の該期を代表する地区の一つとなっている。

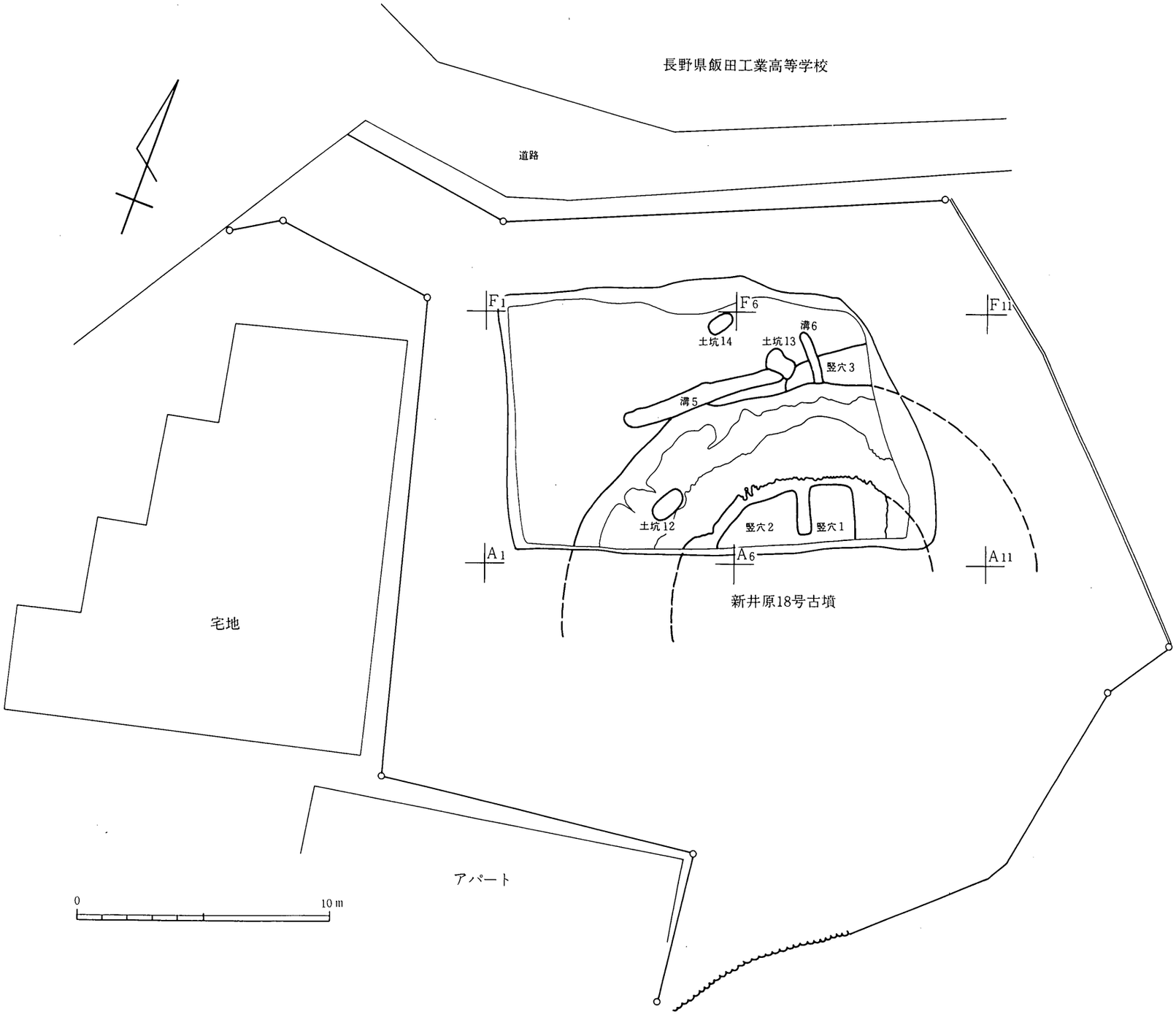
続く、奈良、平安時代については、当地区が、歴史上最も注視されるべき時代といえる。それは、先述した恒川遺跡における、古代伊那郡衙址の存在であり、定額寺院の寂光寺の存在である。この時代、伊那谷の政経の中心であったことはいうまでもなく、さらに、大和朝廷による国政遂行上でも欠くことのできない地であったといえる。

次時代の中世以降が、当地区の歴史資料の希薄な時代であり、南本城、北本城の二城があるにもかかわらず、具体的な歴史事実は未解明な状況である。しかし、各所で行なわれている埋蔵文化財の発掘調査において、輸入磁器を含む、他に例のないような優品の出土することが多く、史実には登場しないまでも、当地域において重要な役割をはたしていた地区と推測される。

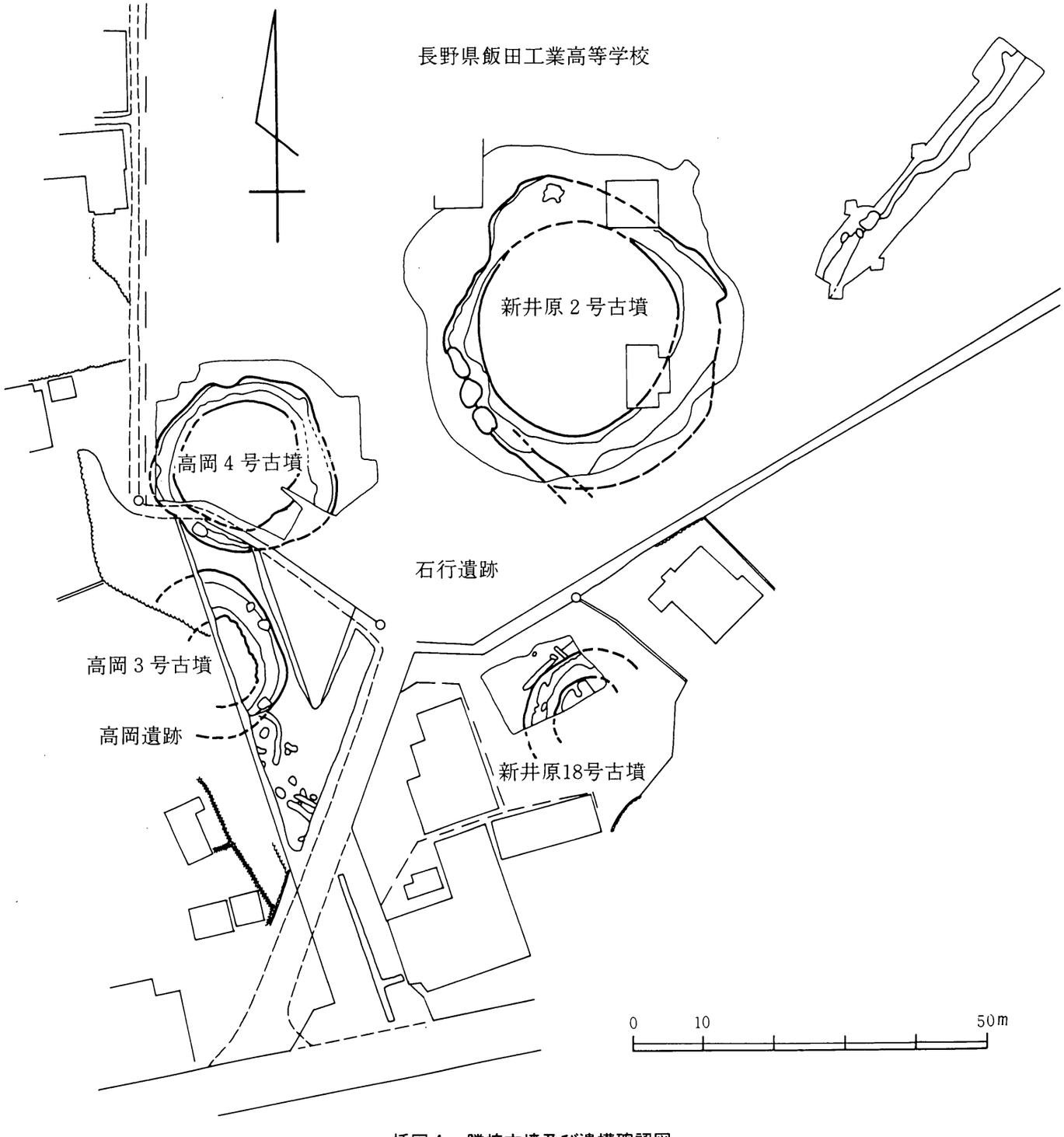
以上のように、各時代それぞれに重要な意味をもつ歴史背景の認められる地区の中に、本高岡遺跡がある。そこは、地域内北端部の古墳密集地区であり、今回の調査でも新たな古墳が確認されたわけで、この地が、古墳をはじめとする墓域としての、土地利用の姿がより一層明確に示されたといえる。



挿図２　調査位置及び周辺図



挿図3　高岡遺跡遺構全体図



挿図４　隣接古墳及び遺構確認図

Ⅲ　調査結果

1．遺構と遺物

1）古墳

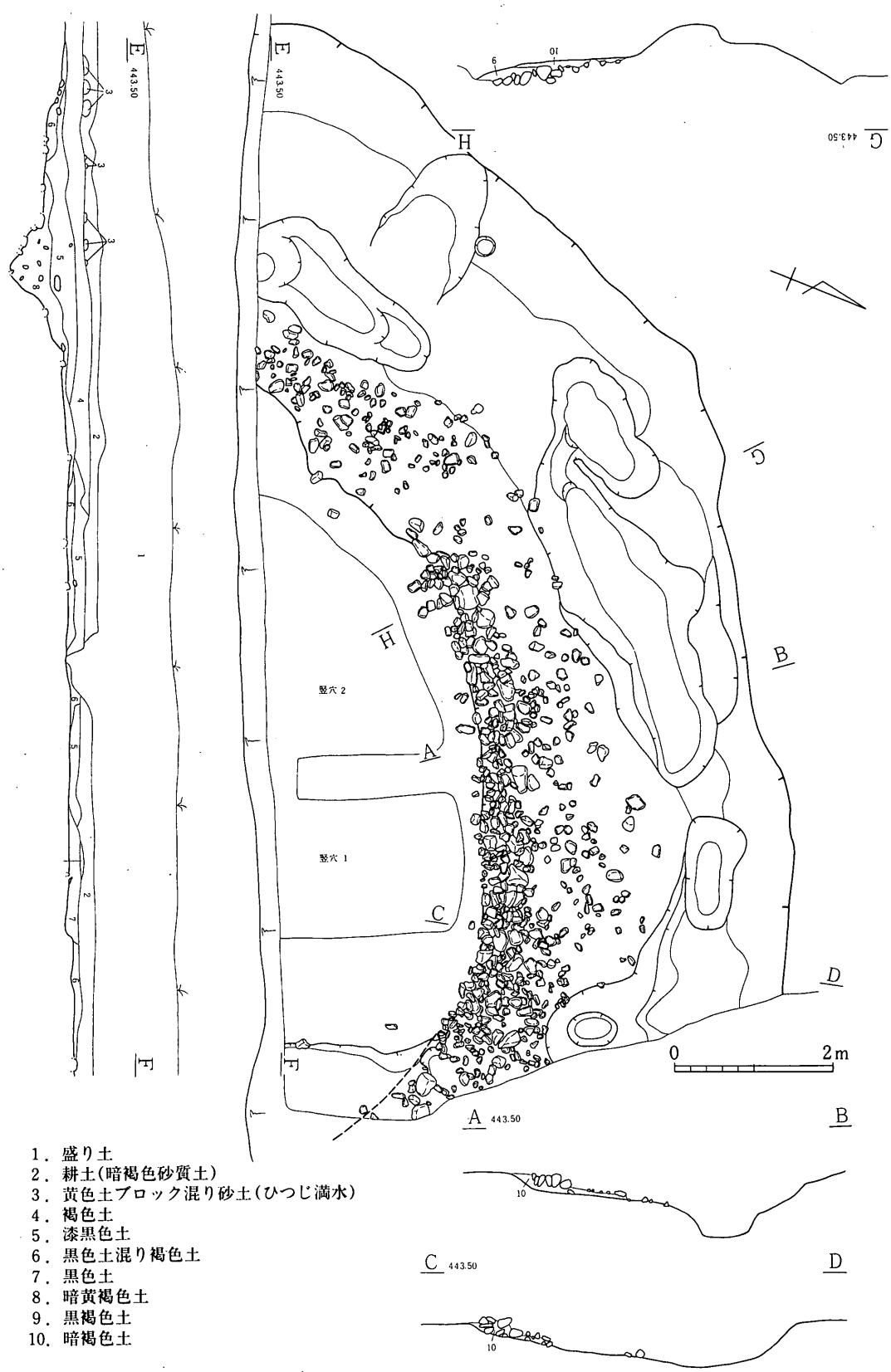
①　新井原18号古墳　（挿図4・5　第1図）

調査範囲の南西に周溝を検出した。本古墳には、伝承等がまったく無いため、新たに新井原18号古墳の名称を付し調査した。本古墳の西側55mに高岡3号古墳、北西60mには高岡4号古墳があり、真北55mに新井原2号古墳がある。古墳の中心から中心までの距離は、以上のようであるが、それぞれの古墳の周溝外縁から外縁までの距離は25〜35m程で、隣接している。また、南東150mには高岡1号古墳がある。

本古墳の墳丘部は削平されており、調査できたのは北西側の周溝¼程である。未調査部分が多いが、円墳で、全体規模は周溝外側で直径22m程を測るものと考えられる。未調査区との土層観察によっても、墳丘基部面（旧地表）から10cm程を把握できる部分があるのみで、構築時の状況を把握するには至らなかった。確認できた周溝の幅は4mを測る。深さは検出面から最深部で70cmを測り、北から南へ低くなるが、比高差は25cm程である。底部は、中央部が溝状に凹められ、凹凸がある。また、西側の一部分はこの溝状部が認められず、検出面からの深さも40cmと浅い所がある。壁面と底部との境も明瞭でない、いわゆる土橋状となっているが、これが意図的なものであるのかは把握できなかった。壁面は一部を除いて緩やかに立ち上がっている。これは、本来の周溝の肩部も削平されているためと考えられる。周溝内の覆土は、大きく二層に大別される。下層には石が全体に混入しており、一気に埋まっていると考えられる。葺き石の保存状態は、北側の上部を除いて極めて悪く、地山中の石が露出している部分がある。石は皆花崗岩の河原石である。また、西端には周溝覆土を掘り凹めた、土坑が確認されている。

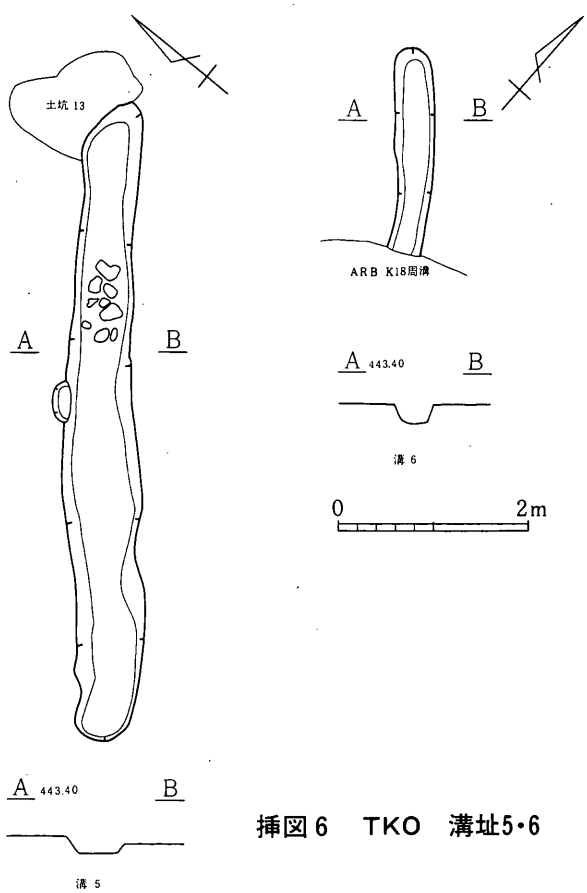
出土遺物には、須恵器坏（第1図1）と、土師器及び縄文時代中期土器の細片があるのみで、直接付属すると思われるものは無い。須恵器坏は、底部に糸切り痕があるもので、当古墳の構築時期とは時間差がある、周囲にこの時期の遺構が無く、平成元年度に市道改良工事に伴った調査で、本古墳と隣接する高岡3号古墳の周溝中に確認された奈良時代の土坑2の例もあり、一世紀を隔ての祭祀等が行なわれていた可能性がある。しかし、遺構の把握はできなかった。

時期を、今次調査結果から具体的に実施するのは不可能であるが、周辺の古墳の状況等から判断して、6世紀から7世紀初頭に築造されたと考えられる。



1．盛り土
2．耕土(暗褐色砂質土)
3．黄色土ブロック混り砂土(ひつじ満水)
4．褐色土
5．漆黒色土
6．黒色土混り褐色土
7．黒色土
8．暗黄褐色土
9．黒褐色土
10．暗褐色土

挿図5　新井原18号古墳及び南側用地境土層図



挿図６　TKO　溝址5・6

２）溝址

①　溝址５　（挿図６）

調査範囲の中央に検出した。新井原18号古墳周溝と接しており、土坑13と切り合っている。主軸はN52°Eを示し、北東南西方向に長さ７ｍを確認した。土坑13と切り合う北東部は止まっているが、南西部は傾斜地のため削平されていたものと考えられ、更に延びていた可能性が高い。幅60～80cm、深さは15cm前後を測る。底部は平担なもので、比高差もない。覆土は黒色砂質土の一層である。

遺物には、縄文中期土器数点と、陶器、青磁の破片がある。ほかに、用途不明の鉄器（第１図２）が検出面で出土している。いずれも本址に付属するものかは不明である。

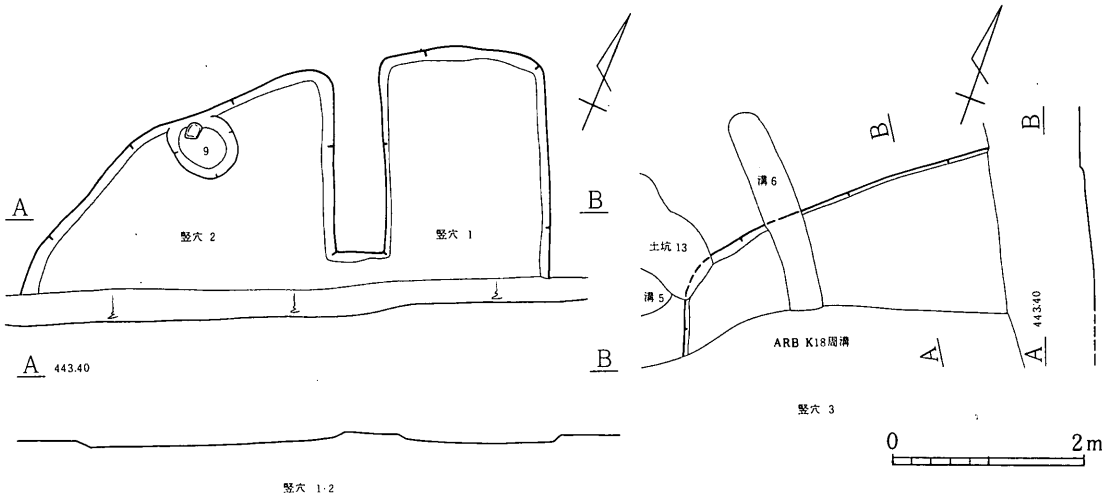
時期、性格等を判断できる材料はない。

②　溝址６　（挿図６）

調査範囲の北端に検出した。竪穴３を切り、新井原18号古墳周溝と重複する。周溝部ではプランも把握できず、新旧関係も不明である。確認できた長さは、北西から南東に２ｍである。幅は40cmで、深さは15cm前後を測る。底部は比較的平坦なもので、確認した部分での比高差は南東側に12cm低くなる。覆土は黒色土の一層で、一気に埋まっている。

出土遺物は、無い。

時期、性格は、不明である。



挿図7　TKO　竪穴1・2・3

3）竪穴

①　竪穴1　（挿図7）

新井原18号古墳の墳丘基底部に、竪穴2と共に確認した。南側は未調査部分へ延びており、この部分の土層の観察により、竪穴2を切っていることが確認された。調査できたのは2.3×1.7mである。平面形は北西、南東に長い長方形と考えられる。覆土は漆黒色土の一層である。底部が平坦でないため、壁高は3～18cmと場所によって異なっている。壁面は角度をもって立ち上がる。本址に付属する穴等の施設は確認できず、性格も不明である。

出土遺物は、少なく、図化もできない破片で、本址に伴うものかは不明である。縄文土器、土師器坏底部があり、坏には糸切り痕が認められる。

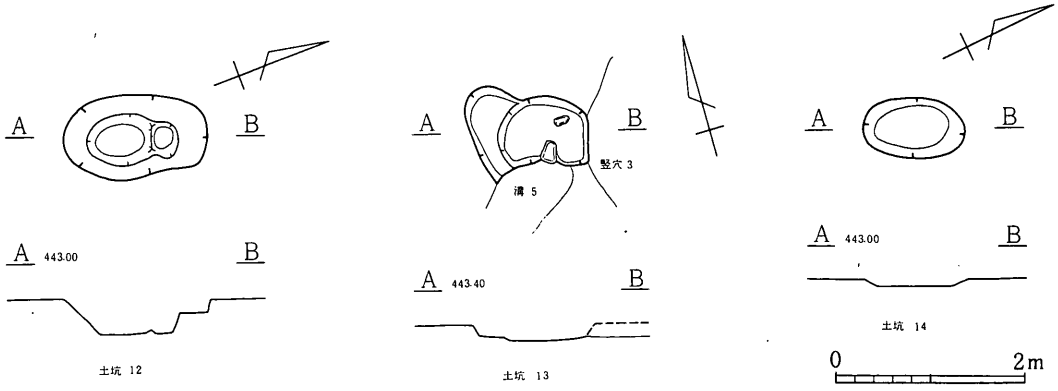
時期、性格は、不明である。

②　竪穴2　（挿図7）

竪穴1の西側に隣接して検出した凹みで、穴が確認されたため竪穴としたが、土層と平面形から見ると新井原18号古墳の盛り土とも考えられる。南側は未調査部へ延びている。西側は、葺石残存部と同様の弧を描いており、全体形は把握できない。確認できた規模は2×3mである。覆土は黒色土である。底部は比較的平坦なもので、壁面は角度をもって立ち上がる部分と、そうでない部分がある。壁高は5cm程を測る。本址に直接付属する施設であるかは確認できなかったが、深さ12cmの穴が一つ検出された。

遺物は、何も出土しなかった。

時期、性格は、不明である。



挿図8　TKO　土坑12・13・14

③　竪穴3　（挿図7）

調査範囲の北東部に検出した。新井原18号古墳周溝と、溝址6に切られ、東側は未調査部分となる。平面形は、南側が古墳周溝に切られるためはっきりしないが、ほぼ方形と考えられる。確認できた一片の長さは3.4mを測る。覆土は、漆黒色土混じり褐色土で一気に埋まっており、ブロック状の埋土も認められることから、人為的に埋めている可能性もあるが、確証は得られなかった。壁高は5cm前後を測り、壁面は角度をもって立ち上がっている。底部は平坦なものである。

遺物は、何も出土しなかった。

時期、性格は、不明である。

4）土坑

①　土坑12　（挿図8）

新井原18号古墳の周溝内西の覆土中に確認した。検出面での平面形は小判形を呈しているが、底部の状態で見ると、中央部からやや北側に4cm程の高まりがあり、穴と切り合っている可能性がある。規模は1.5〜0.9mで、長軸方向はN20°Eを示す。深さは遺構確認面から、最深部で37cmを測る。壁面は上部が緩やかで、穴状となる下部は、垂直に近い角度で掘り凹められている。覆土は周溝上層と同じ漆黒色土である。また、本址はこの漆黒色土が、周溝覆土下層の暗黄色褐色土に至っても円形に残存する部分が認められたため、精査して、土坑であることが把握された遺構である。そのため、周溝覆土のどの位置から掘り凹れられていたかは不明である。周辺の遺跡調査で古墳周溝内に土坑が確認された例として、本遺跡北の石行遺跡、新井原2号古墳、西の高岡3号、4号古墳の周溝内の土坑（馬を埋葬した土坑墓を含む）がある。本土坑も、これら土坑と同様に、同時期にその被葬者との直接的なつながりは考えにくいが、なんらかのつながりを持った人の行為である可能性は高い。遺構が周溝の覆土中にあるため、把握できない部分が多く、すべての古墳に対し同様の行為が行なわれていたのかも不明である。しかし、このことは、古墳

の構築時期に差があっても、その後の祭祀、追葬等が長い間行なわれていく姿の一端がうかがえる。

遺物は、出土しなかった。

詳細時期は不明であるが、新井原18号古墳築造後やや時期を於いて、周溝が埋没する前段階の時期と考えられる。

② 土坑13 （挿図８）

調査範囲の北側に、溝址５と切り合って検出された。のちに、竪穴３とも接していたことが把握されたが、、溝址５、竪穴３との新旧関係は確認できなかった。規模は1.2×0.7ｍを測る。平面形はかなり歪んでおり、底部に高低差が認められることから、南北方向と、北西南東方向に長い、楕円形の土坑が二つ切り合っている可能性が高い。検出面からの深さは18cmを測り、底部は平坦なものである。覆土は黒色土混じり褐色土の一層である。

遺物は、出土しなかった。

時期、性格は、不明である。

③ 土坑14 （挿図８）

調査区北側の中央部に検出された。平面形は南北に長い楕円形である。規模は105×65cmを測る。底部はほぼ平坦である。確認できた深さが検出面から８cmと浅いためか、壁面は緩やかに立ち上がっている。覆土は黒色土混じり赤褐色土の一層である。

遺物は、出土しなかった。

時期、性格は、不明である。

５）遺構外遺物 （第１図）

本調査で出土した遺物で、遺構に直接伴う遺物の出土は皆無であったが、覆土中からのものはそれぞれの遺構で扱った。これらの遺物も合わせ全体の出土量が少なく、遺構外遺物は極めて少ない。遺物には１図３～４を含めた縄文中期土器数点のほか、土師器甕、中近世陶器、磁器片がわずかあるのみで、図化可能なものはない。遺物量の希薄なことの一つには、古墳時代以降本地域が墓域として画一化していたために起因していると考えられる。

Ⅳ　まとめ

今回の調査地点は、飯田工業高校敷地内で調査した新井原２号古墳・高岡４号古墳・市道建設に伴い調査した高岡３号古墳と、現存する石行２号古墳の間にあたり、それらに関連する遺構等の存在が当初から予想された。

調査の結果は、当初の予想に反せず、わずかな調査面積であったにもかかわらず、消滅した古墳１基を確認することとなった。

発見された古墳は、墳丘が完全に削平され、周溝の一部を確認したのみであったが、過去の諸記録には全く登場しないものであり、当地方においても傑出するとされている座光寺地区の古墳文化に新しい知見を与えたといえる。

しかし、調査結果による当古墳についての具体的な内容の把握は、周溝の一部分のみが残存するという状況の中で、困難といわざるを得ない。また、本墳に直接関連するとみられる出土遺物も殆どなく、周囲に分布する各古墳の状況から、径20ｍ余の本墳は小規模な部類に入り、比較的新しい段階に構築されたものと推測される。

一方、本墳の位置する古墳群内における位置等から見ると、種々の意義があるといえる。

長野県史跡である前方後円墳高岡１号古墳を盟主的な存在として、周辺に分布する高岡古墳群は、径数百ｍ四方の範囲内に54基が分布していることとなる。

このように、当地方屈指の群集墳的な在り方は、南側一帯に展開する恒川遺跡群の居住者に係る墓城としての姿を如実に物語るものといえる。

下伊那史２・３巻に記載された高岡古墳群の数は47基となっているが、近年の諸開発等によって新たに確認された古墳は、本墳を含め７基もあり、連綿と続く恒川遺跡群の居住者達の奥津城としてこの一帯があり、地域の中でもそれぞれの地区が相互に関連し合って地域全体の様相を形成している。

そうした中に、今回発見された新井原18号古墳が１つの要素として加えられたわけである。しかし、今回の調査では、具体的な内容を捉えられる資料等は検出されず、未調査である東半部分に何等かの重要な資料が包含されている可能性を期待する所である。

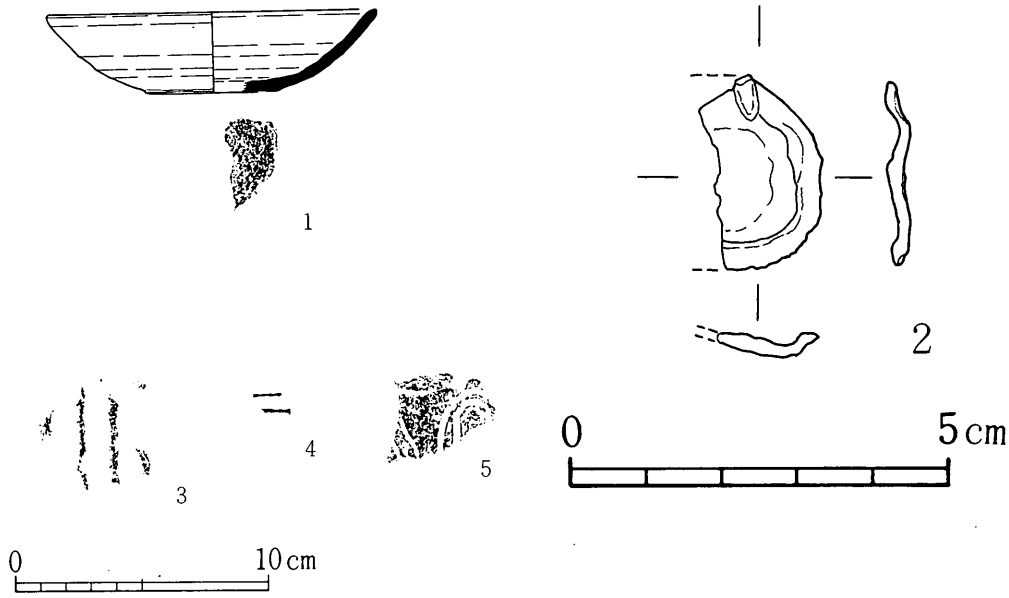
なお、50余基の高岡古墳群の個々について、その具体的な内容を把握できるものはごくわずかであり、この古墳群の持つ本質を具体的に明らかにする手段は、個々の古墳について発掘調査等を伴った精査検討によるしかなく、今後の課題ともいえる。

結局、近年の急激な諸開発の中で一朝一夕には成し難い面もあるが、文化財保護の本旨として、地道な活動の中から当地方を代表する古墳文化そのものの内容解明が成し得るといえる。

引用参考文献

市村咸人　1955「下伊那史」第２巻　下伊那郡誌編纂会
市村咸人　1955「下伊那史」第３巻　下伊那郡誌編纂会
松島信幸　1966「伊那谷の段丘」　下伊那地質誌調査資料No. 2
飯田市教育委員会　1986「恒川遺跡群」
飯田市教育委員会　1988「恒川遺跡」田中・倉垣外地籍
飯田市教育委員会　1990「高岡遺跡」高岡３・４号古墳

図　　版



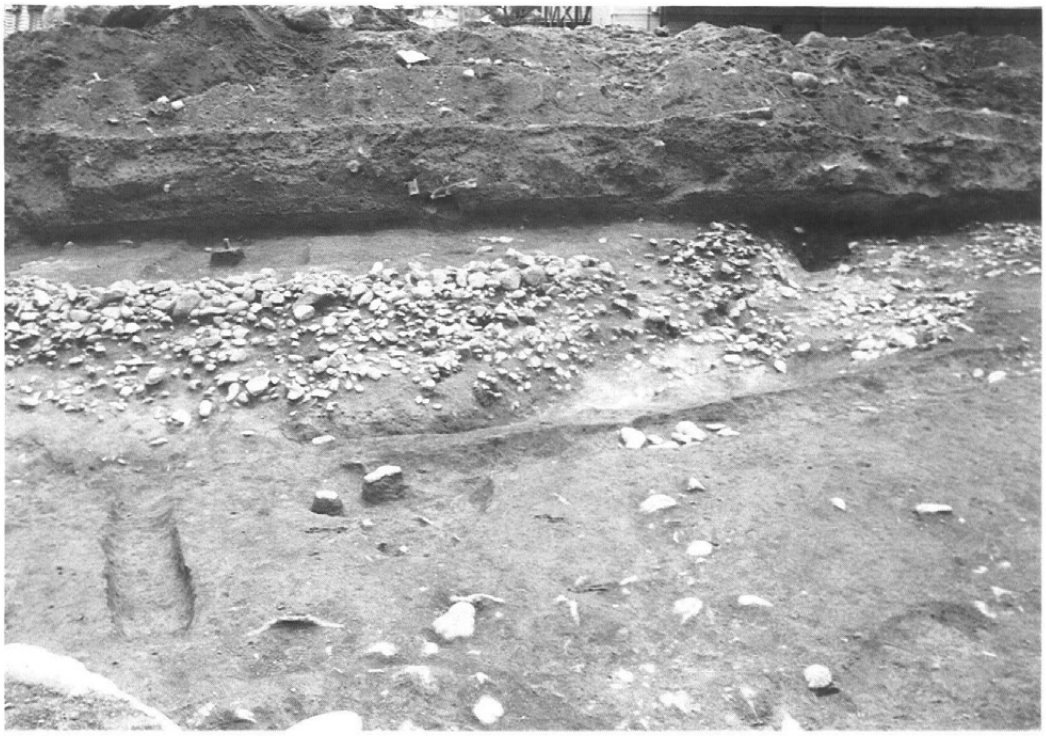
第1図　高岡遺跡出土土器，石器(1　ARBK18周構　2　溝址5　3～5　遺構外)

写 真 図 版

図版 1

調査地調査前　北西から

同　南西から



新井原18号古墳　北から

同　東から

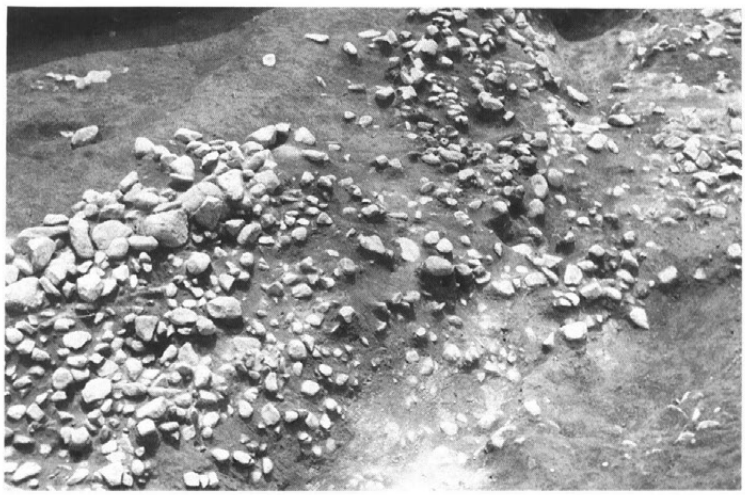
図版 3

新井原18号古墳　西から

同　茸石検出状態　東から

新井原18号古墳
茸石．検出状態

同上

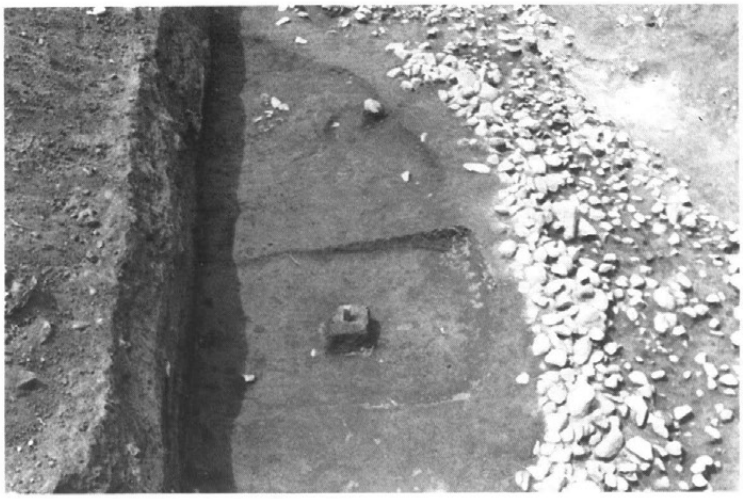


同上

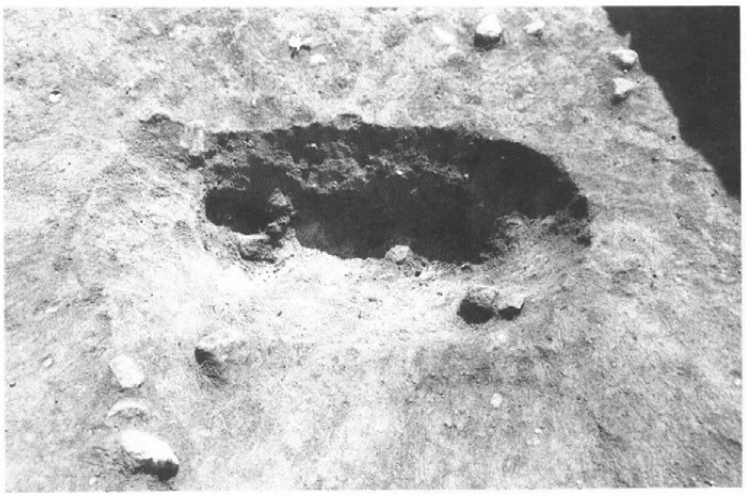
図版 5

溝址 5

溝址 6



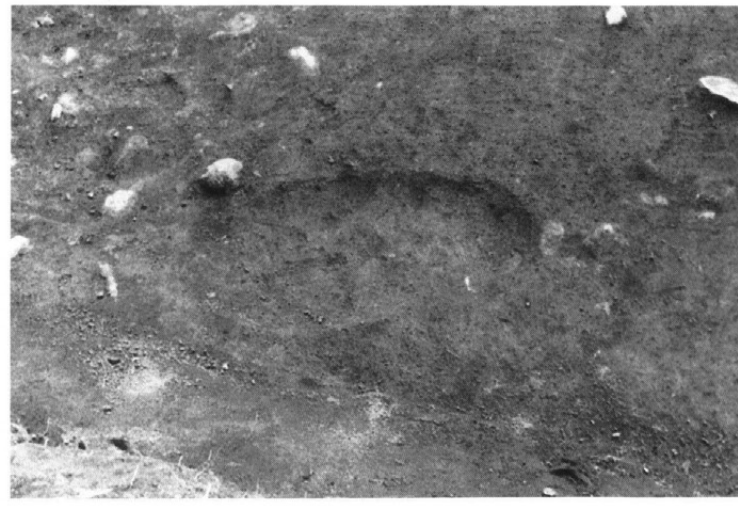
竪穴1・2



土坑13

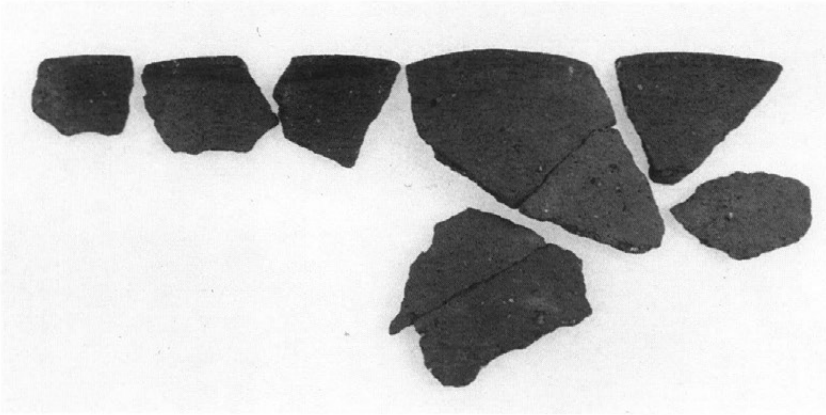
土坑14

図版 7



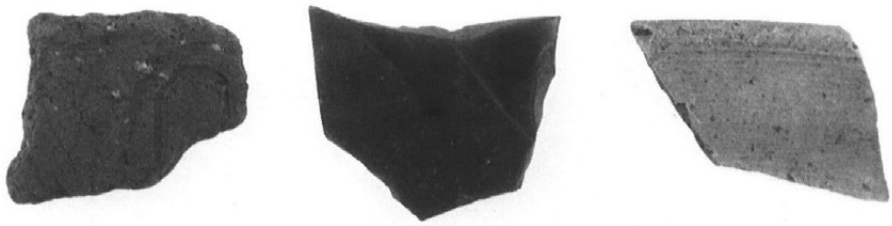
土坑14

調査地全景　北から



新井原18号古墳
周溝内出土
須恵器抔

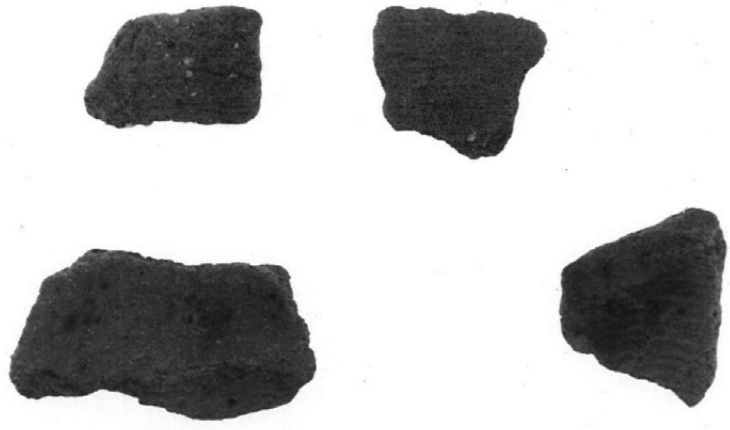
同
裏面



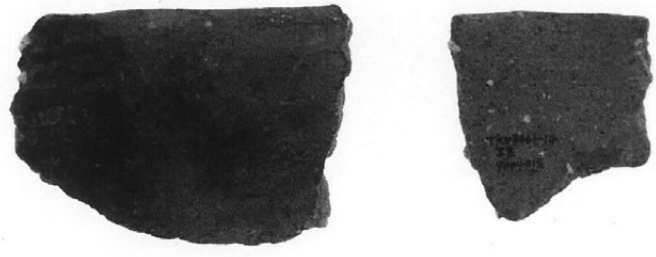
溝址 5　出土土器

同
鉄器

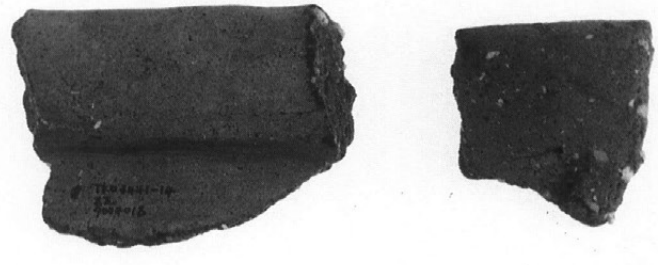
図版 9



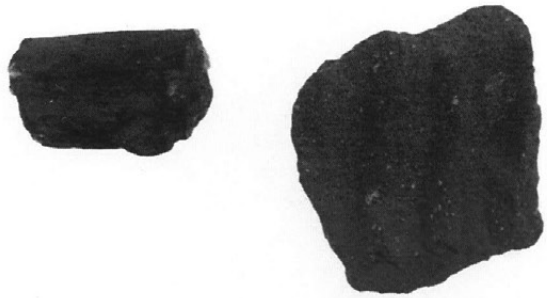
竪穴 1
出土土器



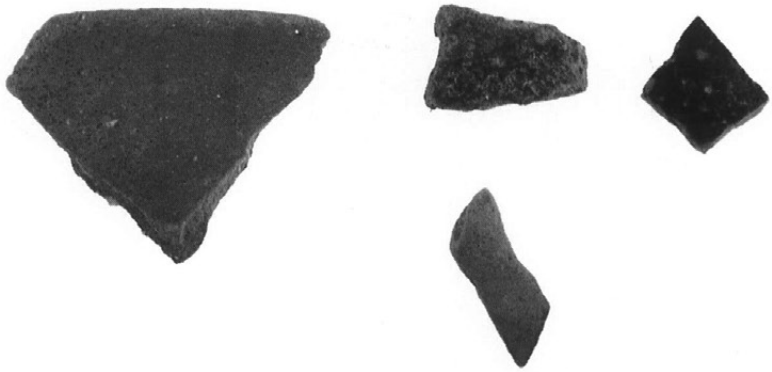
遺構外
出土土器



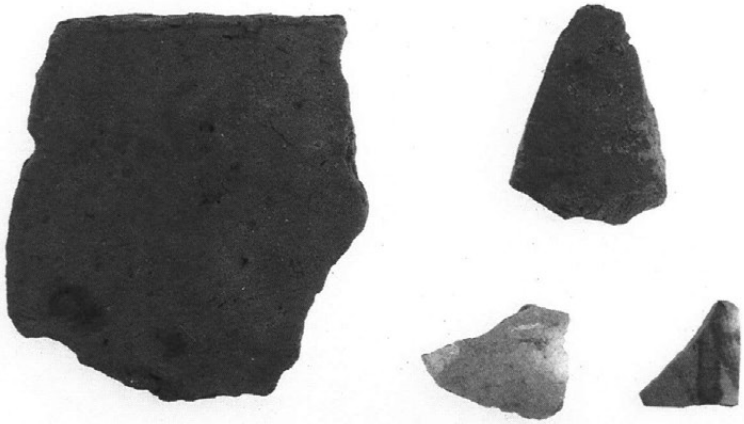
同
裏面



遺構外
出土土器



同上



同上

図版11

重機による表土剝ぎ

同上

遺構検出作業

遺構検出作業

古墳周溝
掘下げ作業

古墳葺石
検出作業

図版13

遺構掘下げ作業

清掃作業

測量作業

高 岡 遺 跡

新井原18号古墳

長野県飯田工業高等学校学生会館建設工事に先立
埋 蔵 文 化 財 包 蔵 地 緊 急 発 掘 調 査 報 告 書

1991年３月発行

編集・発行　長野県飯田市大久保町2534番地
飯 田 市 教 育 委 員 会

印　　刷　飯 田 共 同 印 刷 株 式 会 社
（電）23－3889㈹